

プラトンの美學

深田 康算

プラトンの藝術論は名高いものである、又色々な意味に於て興味深きものではあるが、併し彼の美に關する言説は其れに較べて遙かに其以上の意義を有してゐると云はなければならぬ。藝術學が其祖をアリストテレスに有すると云へるならば、美學は確かにプラトりに於て其祖を見出すとも云へる。美の問題が哲學上の主要なる諸問題の間に地位を占めるやうになつたこと、世界觀及び人生觀の上に於て重要な役目が美に與へられるやうになつたとは、實にプラトりに始まるのである。さうして此地位と役目とがそれ以來再び學者に依りて見失はれることのなかつたのも亦實にプラトりの記憶に負ふ所が少くなかつたのであると思はれる。美學が美に就ての考察として藝術の研究から無理に引き離された爲めに動もすれば單なる美の哲學として名のみ美しき概念構成に陥つたことのある罪を、溯つてプラトりに歸せしめやうとする人があるとしても、藝術の研究が又時として美を忘れた爲めに陥らなければならなかつた所の弊から之れを救つた効績をも亦、さうすれば、吾々

はプラトニ認めなければならぬ。アリストテレスに依つて開かれた藝術の研究が傳承者の手に於て單なる技巧上の詮議に流れ去つた時美の従つて藝術的見方の威嚴を吾々に注意することを怠らなかつたものは畢竟プラトニの泉に汲んだ哲學者達なのであつた。私を見る所に依れば藝術學と美學との分れ分れに走つた二つの流れを其根源に復へして之れを一となし其れに依つて藝術と美とに關する深い理解を可能ならしめることは近代美學の重要な一つの課題である。プラトニの美學及び藝術論に於ける一つの根本的なる欠陥は實に美と藝術との分離——若しくは十分ならざる一致——に在つたと思はれる。然しながら此兩者の一致に就ての十分なる認識を彼に強要するよりは(さうしてそれは事實無理なる強要である)と吾々は遂に知らなければならぬであらう吾々は寧ろ假令藝術から引き離された美に就てあるにせよ美に就ての多くの深い洞察がプラトニに依りて與へられたとを悦ぶべきであらう。藝術が自然に對して有する對等若しくは優越の地位に就いての認識は古代人の——敢へて健全なりし或は分裂せざりしとは云はれ得ぬであらう所の——意識には開示されなかつた。總てが自然であつた所に於ては藝術の價值と意義とは認識されるべくもなかつたのである。而して美が藝術に於

て優越なる若しくは純粹なる形に於て現はれると云ふ思想は極めて近代的なる考へ方の所産なのである。

プラトノの美學を一つの組織立てられたる學說として叙述することの可能は少くとも疑問に屬する。此困難な仕事を私は今此に試みようとするのではない。唯數個の注意すべき點殊に美の一般的なる特殊性に關するプラトノの所說を論述して見ようと思ふ。

一

先づ第一に注意すべき點は、ユリウスワルターが已に指摘した様に「其自ら美なるもの」と或他のものゝ爲めに美なるものとの區別、或は「絶對的美」と關係的美との區別をプラトノが明かに打立てたと云ふ點である。J. Walter, *Die Geschichte der Aesthetik im Altertum*, S. 168 f.

「フィレプス」五一に於てプラトノは眞の若しくは純粹の快感が色や形の美により又香や音に依りて興へられることを云ひ、さうして形の美に就て次の様に述べて居る。「形の美と今余の云ふ所の者は多くの人々がさう取るであらう如き、例へば動物や繪

畫などの形の美を指すのではない。余の意味する所のものは直線や圓であり、又其等より成り立つてゐる平面形及び立體形である。此等の形は決して動物の形や繪畫に描かれた形の様に單に關係的に(或他のものゝ故に)美 *ἕγος τε καὶ αἰτία* なるものたるに止まるのではなくして、絶對的に其自ら美 *καλὰ κατ' αὐτὰ* なるものである。さうして此等の形には其れに特有なる快感 *ἡδονὰς αἰσθητάς* が伴ふ。此所に含まれて居る所は、第一には「其自ら美なるもの」、第二には其れの例として幾何學的形式等の擧げられてゐること、而して第三には其れに「特有なる」快感の伴ふこと、此三點であり、孰れも夫々注目すべき事項であるが、其うち最も注意すべきものは「其自ら美なるもの」の概念である。此概念の確立に依りてプラトンは、ソクラテス流の美即善若しくは美即用、若しくは美即合目的の見地から全く脱却して始めて「其自らに於て美なるもの」を注意し、斯くして云はゞ美學の對象たる美の獨立性を認めたと云へる。

ソクラテスの美に關する見解が如何なるものであつたかは、ソクラテス其人を一體吾々は如何に見るべきであるかゞ已に問題であることを考へれば、固より決して容易に論斷し得べきことでない。クセノフオンの諸書に傳へられてゐるソクラテスの言説が其儘歴史的に忠實なるものとして受取らるべきでないことは最早云ふ迄

もない。(此點に關しては殊にハインリッヒ・マイアト H. Maier, Sokrates, 1913 参照)。併しながら美に關するソクラテスの言説としてクセノフォンの「シムボジウム」及び「メラピリア」に傳へられて居る所は、是等の著書が傾向書であり Logoi Sokraticoi の一種に過ぎぬとは云へ、従つて歴史的に忠實たる記録たる價值を有せぬとは云へ、それであるからと云つて之れを全然ソクラテスの見解でないとして断定し去ることは出来ないであらう。寧ろ此等の言説は、第一には決して一つの學説と云はるべきものでない程單純なるものである點から、第二には明らかに逆説たることを意識して述べられてゐると云ふ點から、さうして第三には、此逆説の内容の上から、吾々が之を恐らくソクラテスの言説若しくは見解であつたと推測しても大なる誤ではないであらうと思はれる。而して之れに據つてソクラテスの云ふ所を見ると、其自ら美なるもの「若くは其自ら整へるもの」*ἐπιπλεον καὶ εὐατό* に僅かに言及してゐる個處は「メラピリア」第三篇第十章第十二節あるが、併し他の多くの個處例へば同上第八章、同上第四篇第六章第九節及び「シムボジウム」第五章からして、ソクラテスは美とは善と同様にやはり有用なるもの「合目的なるもの」*εὐχρηστα* の謂に外ならずと見做してゐることが明らかである。尙詳しく云へば、ソクラテスは必しも美即善と云つて居るのではな

い、美も亦善と同様に或物が有用なりや目的に適合せりやに従つて規定さるゝ性質であり、有用又は合目的と云ふとを離れて存在するものでないと云ふのである。其れ故に或場合に美なるものが或他の場合に美ならざるゝとがある。美とは其自らに於て云はるべきではなくして、用及び目的に關係して、始めて云はるべきである。即ち「其自ら美なるものは無いのであつて、唯、或他のものゝ爲に美なるもの」のみがある、絶對的美は無くして關係的美のみがあると云ふのである。ソクラテスの此見解が如何に逆説的であるかは云ふ迄もない。又如何に此逆説的斷言が人々の注意を美に就て謀々する耽美者流の議論から翻つて尙一層重要なる所の問題に向はしめるに與つて力あるものであつたであらうことも察し難くはない。而して又此見解が其の根柢に横はつて居る目的論の故に、プラトンの思想の上に其跡を残したことも特に指摘する迄もないことであらう。唯此所で注意すべき點は、プラトンが「其自ら美なるもの」を「他のもの」の爲めに美なるものから明瞭に區別したことに依つて、ソクラテスの見地から脱却したと美には美なるが故に美なる所のものが無ければならぬことを、換言すれば美には美の特殊の原理が無ければならぬとを確立したと云ふとに在る。美なるものが若し盡く、或他のものゝ爲に美なるもののみであるならば、美の原理は即ち其或他のもの」に依り

て規定せられ得るのであり、又規定せられなければならぬであらう。さうして其原理は或は有用でもあり得る、或は目的でもあり得る、又或は善でもあり、完全でもあり得る。併しながら、美なるものゝ中に、其自ら美なるものが唯一つでもあるならば、それは最早他の如何なるものに依つても規定せられず唯美なるものに依つてのみ規定せられなければならない。加之、或他のものゝ爲めに美なるものは畢竟美なるものでなくして、實は或は善なるもの、或は有用なるもの、或は合目的なるものである。「或他のものゝ爲めに美なるもの」もさうであるからして、それが苟も美である限りは其美たることはやはり美の特殊なる原理に依つて規定されるのでなければならぬ。何が然らば美の特殊なる原理なのであるか——それに就てのプラトンの言説は或は吾々に多くを教へぬであらう。併し美の特殊の原理が此に於てプラトんに依り問題として明瞭に提出されてゐることそのことの故に、此個所は最も注意すべきものの一たるを失はないのである。

二

次ぎには、さうならば、此所でプラトンの擧げて居る例、即ち形の美や色の美や音の

美——殊に形の美に就て云はれた直線や圓又其等より成り立つてゐる所の平面形及び立體形——は如何なる意義を有するのであらう。プラト¹が「其自ら美なるもの」と云ふ所のものは幾何學的形式に最も能く認められる形式的なるものを意味するのであらうか。さうしてプラト¹は後の所謂美學上の形式論者に數へられるべきなのであらうか。上に引いた個所の外、プラト¹が所謂形式論者であつたかの如くに解釋せられ得るやうに見える個所を「フェルス」の中から引用することも出来ないではない。例へば「數へらるべきものと測らるべきものと、衡らるべきもの *ἀριθμητικῆς, μετρητικῆς, ὁρατικῆς*」とを除き去るならば藝術に於て残る所のものは少ない(五五)と云ふ如き、又「調節と均整と *μετρίων, οὐμαετρία*」に就て吾々が語る時善の原理は美の本質へ逃れ去る(六四)序ながら引用文の譯は凡て大意に止まるとを附記して置きたい、又此個處の意味の解釋に就ては異説がある(と云ふ如きは其れであるとも云へる。併し是等の個處を此目的の爲めに引照することの不適當なる所以を今此に詳述する迄もなく、プラト¹が「其自ら美なるもの」として挙げた例に、云はゞ通俗的に見て最も解し易きものを取つたのに止まつて、彼の意が決して「其自ら美なるもの」を幾何學的形式的のみに認めることに在つたのでないと云ふことは明らかにせられ得る。蓋しプ

ラトに依ればイデオテス シムメトリア調節と均整とは獨り美にのみ認めらるゝのではなくして、徳にも智にも亦認められるのである。其れ故に調節や均整は形式ではあるに相違ないが、云ふ迄もなく幾何學的形式ではなく、従つて所謂形式論者に就て用ゐられる形式の意味を持つては居らないのである。美は整はざるもの「ἀνετηρον」にあらず「τεμεΐους」八七と云ひ、球體は總ての形の中最も美しきものなり(同上三三)と云ふ如き語をプラトから如何に多く拾ひ集めて來てもそれは決してプラトを形式論者と斷定するには足りない。併し最も明らかに此形式論者説を否定して居るものは「フェイドロ」一〇〇に於けるプラト自身自身の語であるの語である。其所に於てプラトはソクラテスをして次の様に云はしめて居る。「美の原因として賢き人々の數へ擧げる所のものを私は知らない又其れを解し得ない。色の好きや形や其他此種のものか美の根柢であると云ふが如きは私の關せざる所である。物が美たるのは唯美が之れに在るのに據る。總ての物を美たらしめる所のものは美「το καλον」である」と。加之美に就ての重要な言説の含まれて居る「フェイドロス」に於てプラトの取扱つて居る所のものが幾何的抽象的なる形式ではなくして人間の形體美であることをさうして又それが如何に規定されて居るかを記憶するならば、形式論者説の根柢なきことは愈明

瞭とならなければならぬ。

併しながら其れと同時に吾々の前に大なる疑問となり來らねばならぬことは、然らばプラト¹が「其自ら美なるもの」として確立せる所のものは果して何なのであるかと云ふ點である。此疑問は一つのデレンマである。即ち若し「其自ら美なるもの」が幾何學的形式のみであるならばプラト¹は所謂形式論者なのでなければならぬ。若し又それが幾何學的形式のみに存しないならば「其自ら美なるもの」の確立は再び撤回せられなければならぬではないか。以上述べた所からして其れが抽象的なる幾何學的形式に過ぎぬものでないことは明らかである。其れが人間の形體美にも亦認められなければならぬことは明らかである。プラト¹が圓と直線との例を擧げたのは其等のみを以て「其自ら美なるもの」と見做したからではなく「其自ら美なるもの」は動物の形の美や繪畫に現はさるゝ形の美にも亦實は認められなければならぬのであるが、唯例を最も見易きものに取つたのである。而して此例が「其自ら美なるもの」の最も見易き標本として取り出されたのは、其所に調節と均整とが最も手近かに認められるからであるに過ぎない。さうであるからして「フェイド¹」に於ける「美其自¹フェイドルス」に於ける人體美の問題を暫らく措いて「フェインブス」から吾々の

學び得る所丈げに就て云へば、プラトールが「其自ら美なるもの若しくは美なるもの」と呼ぶ所のものは畢竟極めて廣き意味で云ふ所の「調節」と「均整」との形式を有するものの謂に外ならないのである。此形式は一方に於てはプラトールが特に「其自ら美なるもの」として擧げた例のみに見出されるに止まるものでなくして總ての美なるものに認められる性質であると共に、其は又プラトールに據れば、他方に於て唯に美なるものに於てのみ見出されるものではなくして、徳にも智にも即ち善なるものにも眞なるものにも亦見出されなければならぬ所の性質である。唯併しながら、此性質が「他のもの」爲めに美なるものに於てよりも多く、其自ら美なるものに於て見出され、又徳や智に於てよりもより明らかに美に於て見出されることの經驗せられるが故に、彼等からは等を區別して、恰も調節と均整とが就中美の特殊性を構成するものであると考へられたのである。此區別が指摘せられて居ることは注意すべき點である。此區別が指摘されなければならぬことは吾々の同意する所又何人も同意せざるを得ぬであらう。調節と云ひ均整と云ひ又調和と云はるゝ性質が畢竟美の根本的性質でなければならぬと云ふことは恐らくは遂に吾々が事實として承認しなければならぬ最終の點であらう。問題は如何にして此調和を美に特有なるものとし

て、若しくは本當は唯美にのみ認めらるべきものとして規定し得べきかに在る。以上述べた所からして「プラト」が此事實を最も雄辯に語つて居ることは明らかであるとは云へるが、其れを規定し得たとは云へないことも明らかであらう。

三

「フレイブス」の此個所に就て尙最後に注意すべき點は、「特有なる快感を伴ふ」といはれて居ることであらう。而して先づ吾々に思ひ浮べられることは此所に所謂「特有なる快感」が或は「其自ら美なるもの」を規定する原理を含んで居るのではないかと云ふ點であらう。「其自ら美なるもの」には「特有なる快感」が伴ふに止まらずして、此の「特有なる快感」が實は「其自ら美なるもの」をして「其自ら美なるもの」たらしめるのであるとは云へないであらうか。「プラト」が亦さう考へてゐたのであると解釋することが、若しも出來るとしたならば、「其自ら美なるもの」の規定は恰も已に此所に與へられて居るのだと云へないであらうか。此解釋は、併しながら、それが極めて自然に吾々の心に浮び來る如きものである丈、それ丈、それは直ちに單なる吾々の思ひ附きに過ぎぬこと、「プラト」の意ではあり得ぬことが明らかである。斯く解釋することに對

しては、已に「其自ら美なるもの」即ち「或他のもの」爲めに美なるには非るもの」の概念の確立が之れを許さない。快感も有用若しくは合目的と同様に美に取りては或他のものなのであるからである。加之プラトンは「フィレブス」に於ても明らかに「身體及び其他の如何なる物に於ても、物そのものに善いと云ひ氣高いと云ふ性質は無くして、善いと云ひ氣高いと云ふ性質は唯心に於てのみ在り、しかも心に於て善しと認めらるゝものは唯快感のみである」と云ふが如きは悖理に外ならぬ（五五）と云つて居る。「法律論」に於ては「多くの人々は音楽の長所は吾々の心に快感を興ふる所に在ると云つて居るが、それは許すべからざること神を瀆がすものである」（六五五）とさへ云つて居る。尙同上六六八には一層明瞭に次の如くにも云つて居る「音楽は其興へる快感に依りて評價さるべし」と云ふ説の如きは承認さるべくもない。快感を標準として見た時重ぜらるる如き音楽は本當の價値を有しない。之れを有するものは唯善きものゝ摸倣たる音楽である」と。是等の個處からして明瞭であることは、一方に於ては、美や藝術やが其の價値を有するのは畢竟善に基かなければならぬと云ふ思想が究極プラトンの美學の基調をなして居ると云ふ點であると共に、他方に於ては、美の原理がプラトニに従へば少くとも快感には存しないこと、客觀的なる性質に存すると

云ふことである。美には特有なる快感が伴ふけれども、それは云はゞ必然的なる隨伴に過ぎぬのであつて、その本質的要素を成すものではない。その本質的要素をなすものは客觀的性質である。さうしてそれは前述の如くに調節と均整との形式である。而して調節と均整との形式が美として價值ある所以は、後に述べる所から明らかなる如く、プラトニ依りて遂には善に基けらるるのである。

今併し此關係に於てプラトニの言說の中特に此所で引照しなければならぬ所のものは、「ゴルギアス」四七四に於ける其であらうと思はれる。此個處に於てプラトニは恰も有用なるか若しくは快感を興へるか孰れか一方の故に或物が美なるのであること、其他には美なるものゝなるべきことを云つて居る。それ故に此個處は一方に於ては「フイレプス」に述べられて居る「其自ら美なるもの」の確立と恰も對角線的なる矛盾を示すものとも見られ得るであらうし、又他方に於ては美の少くとも一半は快感を興ふること、に於て其本質を有すと主張されて居るとも解釋せられ得るであらう。吾々は如何に此矛盾と撞着とを片附けなければならぬであらうか。

「フイレプス」に於てはプラトニは前述の如くに「其自ら美なるもの」を「他のもの」爲めに美なるものから峻別し確立して居る。之れに反して「ゴルギアス」に於ては、美なる

ものはそれが有用であるか若しくはそれが之れを見る者に對して快感を興へるかに依るのであると云はれて居る。「身體や色や形や音や制度(風俗)やの如き美なるものに就て吾々が之れを美と云ふのは或標準に照らしてさう云ふのである。例へば身體が美であると云ふのは、それが有用であるか若しくはそれが觀照に於て見る者に快感を興へるかに従つてさう云はれるのである。其他に身體美を説明する途は無い。——「フイレブス」に於てたゞ一度極めて嚴密なる形式の下に確立された「其自ら美なるもの」をプラトンは他の個所に於ては全く見失つて、さうして「ゴルギアス」に於ては美を規定する最も低級なる立場に復歸したのであると云ふべきであらうか。プラトーンが「ゴルギアス」に於て説く所は一見さう見られる如くに果してクセノフォンに依りて傳へられて居る所のソクラテスの見解なるものへの逆轉なのであらうか。エドアード・ミュラー(E. Müller, *Geschichte der Theorie der Kunst bei den Alten*)が美に關するプラトーンの諸言説を集録しての論述に據れば、ミュラーの見る所はさうである。併しながら「フイレブス」と「ゴルギアス」との間に認めらるゝ此あまりに明白なる矛盾は、果してプラトーンの名譽を傷けざる如くに解決せられ得ぬ者なのであらうか。(未完)